第41巻　第3号　予告

特集「環境問題を点検する」

自動車排ガスの健康リスク……**横山栄二，内山巌雄**（公衆衛生院）
先端技術と環境汚染……**八木修身**（国立環境研究所）
環境アメニテイ……**高野健人**（東京医科歯科大学）
地域に密着した健康サーベラインセンターのあり方と保健所の役割
……**原田正文**（吹田保健所摂津支所）
地方自治体における環境行政の新たな取り組み……**石井　昭**（川崎市環境保全局）

第41巻　第4号：特集「地方衛生研究所はいま（仮題）」

第42巻　第1号：特集「エイズ（仮題）」

第42巻　第2号：特集「食品の安全性（仮題）」

編　集　後　記

本号は，今年の夏には発刊する予定であったが，超多忙な執筆者に特集原稿を依頼したため，大幅に遅延したことをまずはお詫び申し上げる．その代わりと言う訳ではないが，受動喫煙に関する内外の多くの知見を読者に提供できたと思う．

本年の10月に開催された第51回日本公衆衛生学会総会では，本院の高石昌弘院長が学会長を務めた．学会長要望課題として「喫煙対策」を取り上げ，シンポジウムや特別分科会が企画・実施され，大きな反響を生んだ．

今年5月31日のWHO世界禁煙デーのテーマは，「たばこの煙のない職場―もっと安全にもっと健康に―」であった．来年のテーマは，「Health Services, including health personnel, against tobacco：たばことたたかう保健医療組織・従事者」である．

今年のテーマは「受動喫煙」と関連するし，来年はわが国の公衆衛生各分野の各組織，各個人がこれからどのような「禁煙対策」を実践するかが，問われている．本来ならば，まずは，自らが範を示して禁煙を実践するのが望ましい．先般行われた公衆衛生学会員への喫煙率調査では日本国民平均を大きく下回っていた．しかし，男性22%，女性6%が依然として喫煙者で，共にその73～74%が禁煙意欲を持っていると言う（小川　浩，日公衛誌，39(10)特：66，1992）．文豪マーク・トウェインの「禁煙なんて簡単だ．私はすでに数え切れないほどやっている．」を例示するまでもなく，如何に喫煙からの離脱が困難を伴うかは喫煙者であった私にもよく理解できる．アメリカでは禁煙補助剤として，たばこからの離脱を容易にするために，ニコチン含有のガムやパッチが売られており，テレビでの宣伝も盛んだ．正に「毒をもって毒を制す」を行っている．

よく指摘されているが，やはり喫煙習慣をはじめから身につけないことが最善の方策である．

（大久保千代次）